

中米、古典期文明形成過程の一考察

——特にマヤの南低地帯を中心として——（その三・完）

貞 末 堯 司

3 パッション川流域の土器文化について

先論では、先古典期前期Ⅰから同中期Ⅲまでの六期の土器について、やや詳細に述べてきたが、先古典期という、いわば古典期文明成立のための基盤的、母体的文化の複雑な内容が、単に六期の土器文化だけの分析によって解明されるというわけのものではない。しかも、土器の型式分類によって考えられたマヤ南低地帯の編年体系には、なおそれ自体に多くの問題点が存在していることも知らねばならない。それは、先論で述べたように、主として土器文化の側面から、中米の古典期文明の成立過程を見ていこうとする場合に落ち入りやすい錯誤であるかもしれない。いわば、中米の古典期文明が成立するための基盤的、母体的文化が、何時頃、何処に発生したか、そして、それは土器文化として、どのように具体的に把握され得るかを追求する場合に落ち入りやすい過ちでもある、といえよう。換言すれば、マヤ南低地帯に、最初に出現した土器文化が、果して明確に、古典期文明への直接的な発展を示し得るであろうか。それは具体的に、かつ直線的に一連の発展的系譜として追求し得るであろうか、といった問題なのである。

土器が、その型式によって、時の里程標としての役割を果し得る有力な資料であることについては、多くの人が認めるところであり、本稿の基礎も、正にそこにあったわけである。パッション川流域のセー系土器文化が、資料的には、極めて限られた面をもっているとしても、型式的、編年的には、マヤ南低地帯、パッション川流域の時の里程標としての土器資料であり、同時にこの地域での最早期の土器文化であろうと推定したのである。しかし、セー系土器文化自体についても尚多くの問題があり、それが、直接的に次の文化段階と考えられるマモン土器文化への発展を示すかどうかについては、先論で述べたように、なお、疑問点も少なくない。アルタル＝デ＝サクリフィシオス（以後、アルタルと略称する）遺跡及びセイバル遺跡を中心として発見されるセー系土器文化については、さらに細部について考察する必要がある、その土器文化が具体的にどの

ように発展し、どのような地域で、どの文化層へと直接的に関連づけられるのかを知る必要があるのである。

そこで、本稿は、結論的な意味をも含めて、パッション川流域に成立したセー系土器文化について、更に考察を加え、マヤ古典期文明成立への一過程としての先古典期土器文化の一つの側面を考えてみたいのである。

A) セイバル遺跡発見のセー系土器 = リアル土器群 =

セイバル遺跡は、パッション川の左岸に位置するマヤ南低地帯の有数な都市的遺跡である。石造遺構、石碑、祭壇などが存在する範囲は、東西約 2 km、南北約 3.5 km に及ぶが、グループ A、C、D の主要な建築遺構群が存在する範囲は、約 50 ha ぐらいである (B グループは、規模的に主要グループにはいない) ①。遺跡は、パッション川面より約 70 m ぐらいの高さをもつ台地上に形成されているが、グループ A には、中央広場を中心として、その周辺に多くの遺構が残されている。特に、A-3、A-10、A-18、A-20、A-24 など、ピラミッド建造物が多いグループ A の遺構群は、A-6 建造物の南側から東方に、約 500 m ぐらい真直ぐに延びた幅約 15 m の堤道によって、グループ D と結ばれている。グループ A とグループ D との間には遺構は、それ程多くないが、ボールコート (C-9) と考えられるものや長箱形の遺構、基段遺構などが散在している。また、グループ A から D へ延びている堤道のほぼ中間地点が T 字路となっていて、ここから南方に堤道が延びている。この堤道は、約 600 m で、グループ C の中間地域を通り抜けているが、T 字路部に、祭壇 3 が設けられ、南端部に祭壇 1 が置かれている。しかも、この祭壇 1 は円形遺構 79 の正面階段の前に建立されたもので、堤道と遺構 79 がのる基段は、直接接続されている。現在、このグループ C の地域には、住民の生活が営まれており、農民の家が遺跡の中に数軒建っている。グループ D は、A、C より、はるかに遺構が多く、特に、等高線で 80 m、100 m を測る台地上の約 25 ha の範囲に密集して残っている。中央、東、北、西、西北広場を中心として、ピラミッド遺構は勿論、さまざまなマヤ式建造物遺構が残されている②③④。

セイバル遺跡では、現在までの調査で、六期の文化編年が考えられている。古いほうから、リアル=セー (Réal Xe)、エスコバ=マモン (Escoba Mamón), カントゥーチェ=チカネル (Cantutse Chicanel), フンコ=ツァコル (Junco Tzakol), テペヒローテ=テエペウ (Tepejilote Tepeu), バヤル=ボカ (Bayal Boca) の六期である。本論において、考察する必要のあるのは、特に、リアル=セー土器文化と、エスコバ=マモン土器文化である⑤。

リアル=セー土器は、既に述べた始く、その起源地に関して、なお多くの議

論があり、結論を得ていない。しかし、セイバル遺跡発見のリアル＝セー土器については、かなりの程度、その細部が明確になってきている。リアル＝セー土器は、セイバル遺跡では、特にグループAの南広場、中央広場、中央部から離れた場所で、大きな遺構が少なく、小さなマウンドが散在する場所の三か所ぐらいに集中的に発見されている。しかも、堤道Ⅲの終端部に設置されている豹の祭壇や円形建築物である79遺構の周辺からも発見され、発見地点が、ひじょうに片寄っている点に注意される。また、グループAの中央及び南広場は、79遺構とも関係をもつと思われるが、ここは、セイバル遺跡では、最も高い場所であり、リアル＝セー土器の発見場所の特異性を示している。リアル＝セー土器文化をもって、セイバルにやって来た人達は、リアル＝セー土器が発見される以上の場所を、特に重要視したか、或は、特別な意味のある場所と考えたかであろうが、しかし、リアル＝セー土器の発見される場所は、遺跡全体からみれば限られている^⑥。また、グループAの試掘の知見では、表土下3mの最下層から、リアル＝セー土器は発見されており、この層のすぐ上には、プラスター張りの床面が存在していたということが知られている。このプラスター張りの床面が、リアル＝セー土器と時期的に同一であるか、或は、極めて近い時期のものであるか、については、なお断定できない点もあるが、少なくともリアル＝セー土器と時間的には、あまりへだたりのない時に、既にプラスター張りの床面をもつ建造物が存在していたことを物語っていよう。

さて、セイバル遺跡で発見されるリアル＝セー土器は、四つのグループに大別され、それぞれが、数型式に分類され、全体で13の主要型式をもつとともに、それぞれの型式に相応する亜型式をもっている^⑦。第一番目のグループは、スリップを用いない土器で、表面の調整が、ひじょうに粗略であり、他のスリップを用いた土器とは極立って異なった器肌を呈するところに特長をもっている。元来、素焼の土器は、表面的には粗略であり、種々な方法で表面上の欠点を補う処理がなされているが、スリップをかけると、表面処理上は有効で、ワックスをかけたような光沢とつやを出すことができるとともに、土器の使用年数を延ばすことができる。この無スリップ土器のグループは、表面処理に意識的ともいえるような無調整が認められ、逆に、これが、この種の土器を極立たせている。第二番目のグループは、赤色系土器群とでもよべるもので、スリップをかけ表面調整を入念に行っているが、赤色の色調に数段階の差があるのが特長である。例えば、黒褐色を呈する黒ずんだ赤色のものから、明色に近い赤色まで、表面の赤色に変化があるのが特長である。リアル＝セー土器の赤色系土器は、他のものに比べて著しく型式が多く、リアル＝セー土器群の中でも、主

要な位置を占めたものと考えられる。第三番目のグループに属するものは、白色系土器群である。スリップをかけ、表面上の調整はひじょうに入念で、ワックスをかけて磨研したような趣を呈する。このグループも数型式に細分類でき、更に、その亜型式もある。最後の第四番目のグループは、黒色系土器群であって、スリップをかけたくすんだ黒色から灰色に近い黒色まで、二、三段階の色調がある。リアル＝セー土器群の黒色系土器は、二つの主要型式に分類され、それぞれに亜型式が存在する⑧。

以上述べたように、リアル＝セー土器は、スリップを用いないで粗略な表面処理を行った無スリップ土器群と、スリップを用いた赤、白、黒色系三種類の土器群に分けられるが、それぞれは、更に細かく型式分類されている。以下、それぞれのグループを数型式に分類し、そのうちで、周辺遺跡との関連が推定できるような土器型式を考察してみたい。

リアル＝セー土器群で、第一グループに分類した無スリップ土器は、アチオテス (Achiotes) という型式名でよばれる一群の土器である。アチオテス式土器は三つの主要型式に細分類でき、この三型式は、更に二、三の亜型式に分類できるようである。アチオテス式土器は、テコマテや外反して、更に強く外湾する頸部をもつ深鉢形や同じような頸部をもつ壺形、外反胴をもつ皿及び浅鉢形が器形の主体をなしている。また、口縁部が肥厚したり、膨らんだりしているものも多い (Fig. 5. 6. 参照)。特に使用されたテンパーが、殆ど同一である点は注意をひく所であり、これら土器が同一場所で製作されたことを物語っている。表面調整は、極めて粗略で、風化したものもあり、なめらかな器肌ではない。稀に、道具を用いて表面を磨研したと考えられる痕跡のある破片もある。また、把手付の壺が多くあるが、把手は、厚さ約2 cm ぐらいの環状のものと、約7～9 cm の長さのものが多く。これらは、頸部の湾入部を跨ぐようにつけられており、縦形のものである。しかし、ごく稀に、横位の把手がつけられたものも発見される。

セイバル遺跡におけるアチオテス式土器は、リアル＝セー土器群の主要な土器型式であるのは勿論であるが、次のエスコバ文化層にも類似した多くの土器が発見されている。アチオテス式土器は、実用土器として広く使用され、調理、貯蔵器として利用されたようである。

アチオテス式土器は、ワシャクトウン遺跡で発見された破片から、その名称がつけられたように⑨、パッション川流域のみならず、ペテン低地帯にも同類のものを発見することが多い。特に、ワシャクトウン遺跡のものとセイバル遺跡のものとは、最もよく類似しており、ペテン低地帯には、ある時期にリアル＝

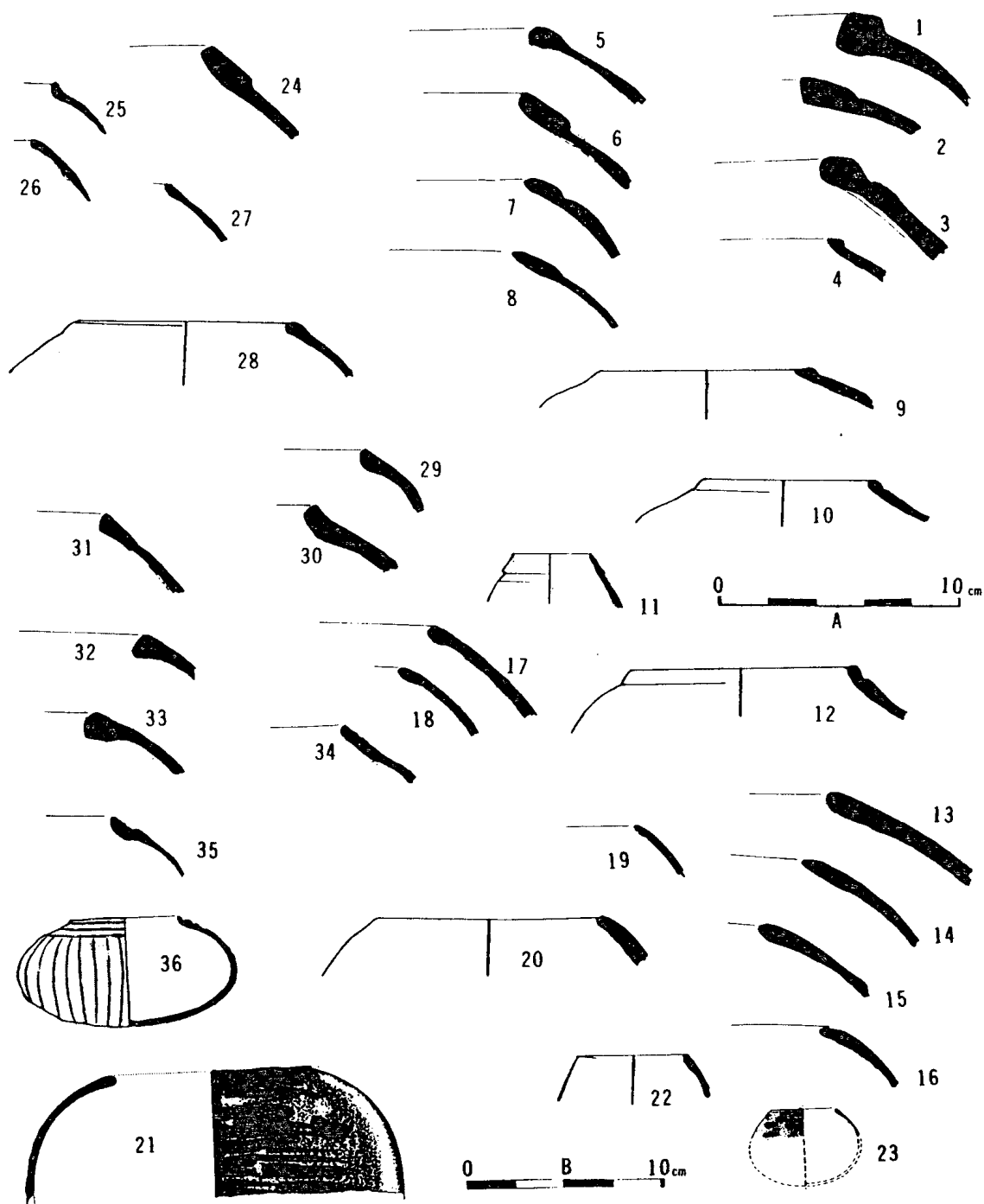


Fig. 5. 各地のテコマテ、口縁部の形態：1～3. アチオテス式、セイバル遺跡. 5～8.11. アルタル遺跡. 4. 9. 10. 22. ミラドール遺跡. 13～16. サンタ＝クルス遺跡. 17～19. セイバル、アルタル両遺跡に最も多い形. 20. 21. ラ＝ビクトリア遺跡. 23. 各地で最も普通な形のテコマテ. 24～28. ヤルマンチャック式、セイバル遺跡. 29～35. ピコ＝デオロ式、セイバル遺跡. 36. “ひしゃげテコマテ” 模式図（スケールA、1～3. 5. 24. スケールB. A以外のもの）

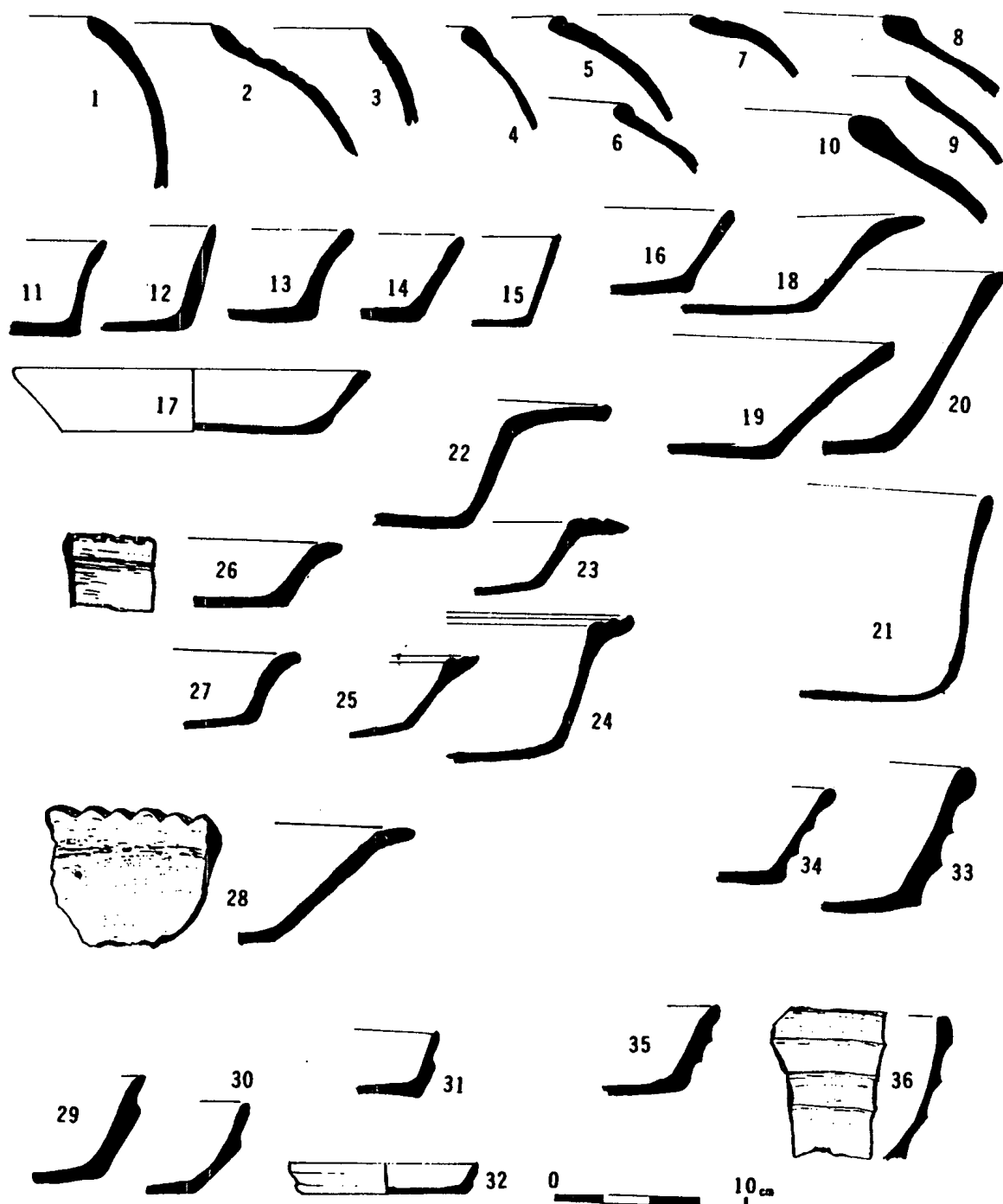


Fig. 6. 1~10各地のテコマテ：1~3. セロ＝デ＝ラス＝メサス遺跡. 4. 5. チャパ＝デ＝
 コルソ遺跡. 6~10. ワシャクトウン遺跡. 11~17. 各地の皿形土器：11. 12. 14~17
 アルタル＝デ＝サクリフィシオス遺跡. 13. 19~21. セイバル遺跡. 18. アルタル＝デ＝
 サクリフィシオス 3b型. 22~25. ピコ＝デ＝オロ式. セイバル遺跡. 26~28. コミスタウン
 式. 29. 30. ダタイル式. 31. 32. ウエッチェ式. アルタル＝デ＝サクリフィシオス遺跡.
 33~36. セトク式. セイバル遺跡.

セー土器文化、それもアチオテス型式の土器が広がったのではないかと推定せしめるのである。また、パッション川流域では、アルタル遺跡にも同型式の土器が発見されており、両者間の強い関連を物語っている。しかし、アルタル遺跡のものは、発見者、A.E., アダムスが「アチオテス＝プレーン (Achiotes Plain)」とよんでいるもので、彼は、リアル＝セー文化層よりも時期的には新しい段階のサン＝フェリックス＝マモン期に組み入れている^⑩。しかし、この土器は、マモン土器文化圏のものと考えerよりは、セー土器文化圏のものと考えられる十分な特長をもっていることを忘れてはならない。

アチオテス型式の土器のうちで、勿論、スリップは用いていないが、文様技法のうえから一つの型式と考えたほうが良い一群の土器がある。バルディゾン式押圧文 (Baldizon Impressed) 土器である。この押圧文様は、殆どが指頭と爪を押圧して作った文様で、軽く押しつけただけの爪形文から、しっかりと指頭を押しつけることで押しつけた周囲に盛り上りをつくり、突起状の瘤をつくって貼付紋的な効果をもつ指頭押圧文まで、いろいろと変化をもっている。しかし、バルディゾン式土器の押圧文は、同じリアル＝セー土器の一型式であるヤルマンチャック (Yalmanchac) 式土器の押圧文とも、ひじょうに似通った要素をもっていることを注意しなければならない。この型式の土器については、後で述べるが、スリップを用いないアチオテス式土器群の表面は、粗略ではあるが、決してスムーズでないわけではない。表面処理が、特別に行われた例は数少ないが、全体的には、なめらかである。

前述の如く、アチオテス式無スリップ土器は、セイバル遺跡から約 50 km しか離れていない、同じパッション川流域のアルタル遺跡からも発見されている (Fig. 5. ～ 7. 参照)。セイバル遺跡のセー系土器とアルタル遺跡のそれとは、どちらが古いかという問題は、後で触れることにして、少なくとも、アチオテス式無スリップ土器に関して、両者間には、ひじょうに類似した要素を発見することができる。特に器形に関しては、両遺跡には殆ど同一の器形が存在する。例えば、テコマテは両者に共通する器形であるが、その口縁部の形態は、全く同一と考えても差し支えないものが多い (Fig. 5. — 1 ～ 3, 5 ～ 8)。元来、テコマテは、その独得な形態ゆえに口縁部は極立って変化しないのが普通である。セイバル遺跡及びアルタル遺跡では、全く同型式の口縁をもつテコマテが存在している。また、外反、外湾頸部をもつ壺形土器も両者間に共通した器形であり、浅鉢形、皿形も、いろいろな形態をもっているが、両者間には、等質的な要素が存在していたことが看取される (Fig. 6, 7. 参照)。

このようにアチオテス式無スリップ土器群は明らかに両者間で相互に深い関

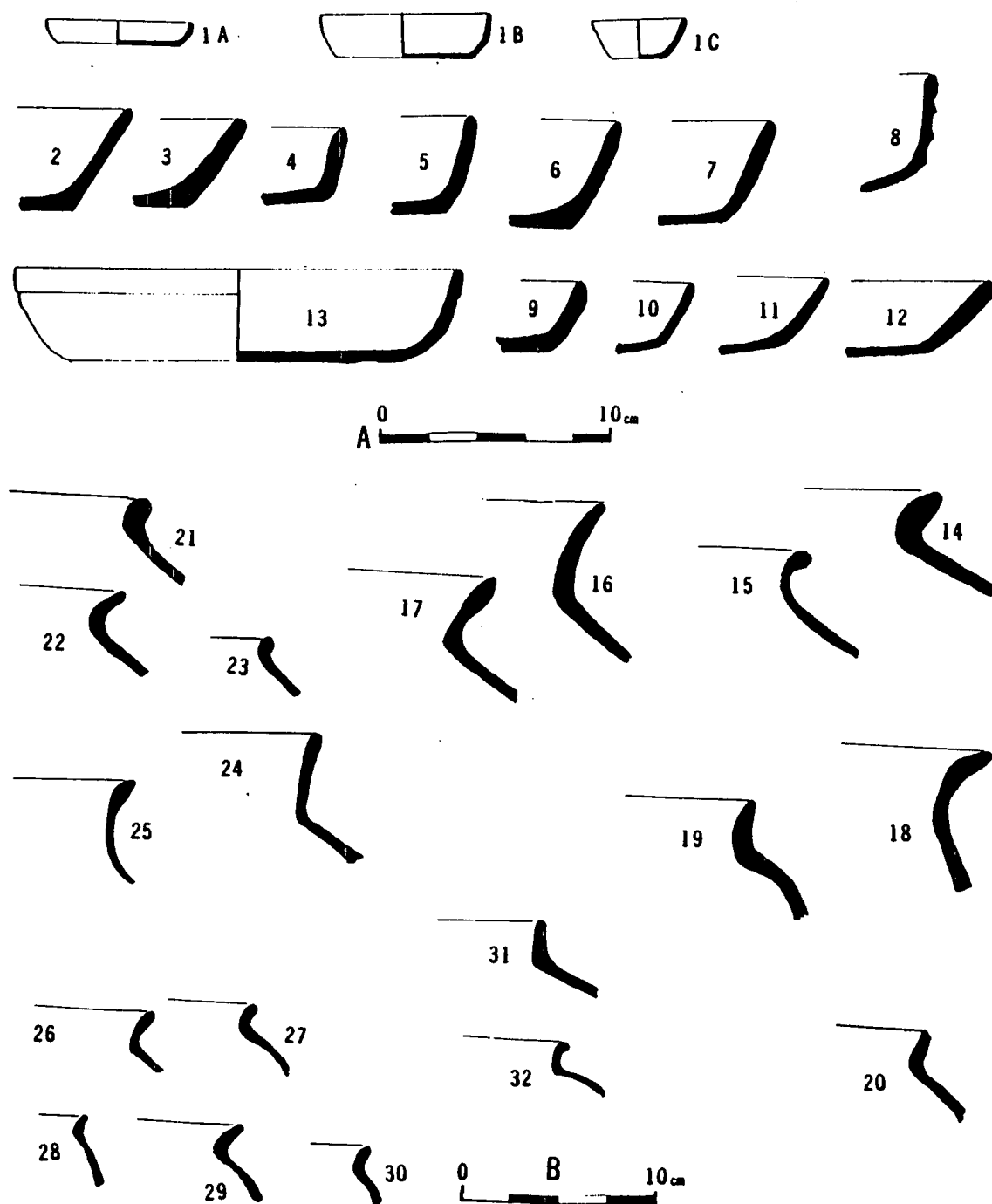


Fig. 7. 1A. 1B. 1C. セロ＝デ＝ラス＝メサス遺跡、皿形土器の模式図． 2～13. 各地の皿形土器：2～8. セロ＝デ＝ラス＝メサス遺跡． 8 は、セイバル遺跡のセトク式と同一技法． 9～13. ラ＝ヴィクトリア遺跡． 14～32. 各地の壺形土器：14～20. セイバル遺跡． 21～25. アルタル＝デ＝サクリフィシオス遺跡． 26～32. ワシャクトウン遺跡． (A スケール． 2～20. B スケール． 21～32適用)

連をもつ土器文化であったと考えられるのである。

次に、セイバル遺跡で第二のグループに属する赤色系土器は、アベリイノ(Abelino)式土器群である。アベリイノ式赤色系土器は、その型式が確立されたのは、アルタル遺跡出土の土器によってであるが、セイバル遺跡では、約700点の破片が知られているに過ぎない^⑪。この赤色系土器の色調には、多くのバリエーションが見られ、明赤色に近いものから、黒味の強い赤色、黒ずんだ赤灰色など、数段階が看取される。これは、スリップのかけかたによって焼成後の器表面に微妙な差が出てくるわけであるが、アチオテス式無スリップ系土器がアルタル遺跡のものとひじょうによく似ているのに比べると、赤色系土器は、両者の間でかなりの相違を認めねばならない。器形は、皿、鉢、テコマテ、壺形などであるが、焼成は総じて良好であり、表面が明赤色を呈するものが目立っている。器体の表面調整は、入念に行われたようで、ワックスがけを思わせるような、やや光沢をもつ程度に研磨されているものもある。

アベリイノ式赤色土器に関しては、重要な問題がある。それは、セイバル遺跡出土のものと、アルタル遺跡出土のものといずれが時期的に古く位置づけられるか、という問題である。一般的に言って、セイバル遺跡の赤色系土器は、アルタル遺跡のそれよりも色調において差があり、セイバル遺跡出土のものの方が、やや黒ずんだ赤色を示し、かつその量も多いのに対して、アルタル遺跡出土のものは、明るい赤色を呈しているということである。つまり、両遺跡間でアベリイノ式赤色土器を比較する限り、セイバル遺跡出土の明るい赤色土器の一群はアルタル遺跡のものに類似し、それとの深い関連を考えることができるが、黒ずんだ赤色土器の一群は、セイバル遺跡に特有な土器群と考えることができる。両遺跡に共通した型式名でよばれるアベリイノ式赤色土器のいずれが、時期的に古いのか。つまり、パッション川流域のセー系土器文化は、セイバル遺跡とアルタル遺跡のどちらに先に定着したか、という問題を提起しているのである。一つの考え方として、セイバル遺跡の黒ずんだ赤色土器のほうが、明赤色土器群よりも古いとする意見がある^⑫。これは、黒ずんだ赤色土器群の方が、製作、スリップ、表面調整など様々な点に技術的な拙劣さがある、という技術論的な根拠をもっているが、層位的に明確になっているわけではない。いずれにしても、セイバル、アルタル両遺跡の先後関係という重要な問題を赤色系土器だけの比較によって決することはできないが、赤色系土器は、この意味でも重要な資料である。また、両者間における表面処理の手法にしても相違があり、セイバル遺跡発見の黒ずんだ赤色系土器が、現在はアベリイノ式赤色土器群に包括されているといっても、今後の資料によっては、別型式を想定せ

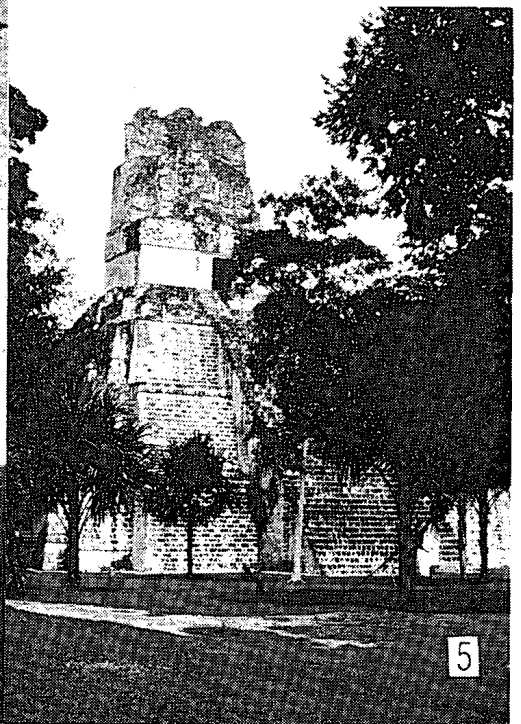
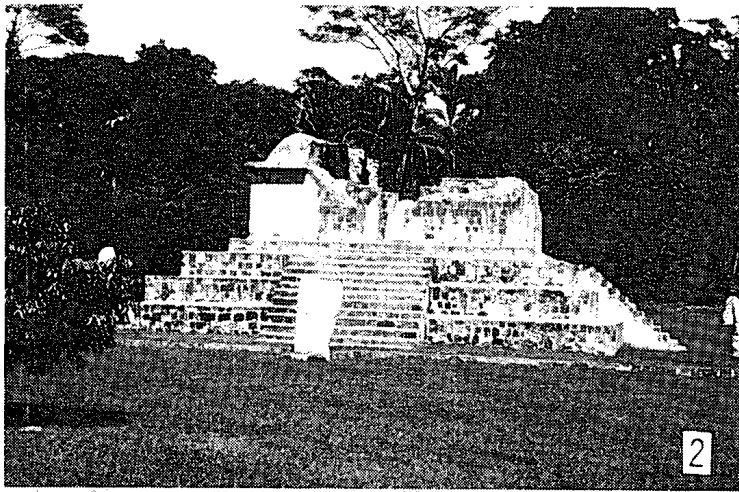
ざるを得ない要素をもった土器群と考えることができる^⑬。アルタル遺跡のアベリイノ式赤色土器は、マモン土器文化のホーベンチュード系赤色土器群とひじょうに類似している点は注意しなければならない。先論で述べたように、マモン土器文化圏の主要な型式であるホーベンチュード式赤色土器の系譜は、ペテン低地は勿論、ユカタン北部低地へも広がりを見せているが、これは、明らかにアルタル遺跡出土のアベリイノ式赤色土器と関連づけて考えなければならない。いわば、セー土器文化とペテン地方のマモン土器文化との関連を明確に、このアベリイノ式赤色土器とホーベンチュード式赤色土器との対比において把握することができるわけである。その意味では、パッション川流域のセー土器文化は、ペテン低地への明かな系譜をもっているということがいえよう。パッション川流域に初めてセー系土器文化が出現して以来、その土器文化は、アベリイノ式赤色土器によって、マモン土器文化への発展の系譜を、具体的に土器文化の上から見せてくれているわけである。このように見てくると、セー土器文化圏の中でも、アルタル遺跡のアベリイノ式赤色土器は、ホーベンチュード式赤色土器のプロト＝タイプであり、セイバル遺跡のそれは、直接的にはマモン土器文化のホーベンチュード系赤色土器とは関連をもたないものであろう、と考えておきたい。セイバル遺跡のアベリイノ式赤色土器、つまり暗赤色系、暗赤灰色系のいわば「黒ずんだ赤色の土器群」は、現在の資料による限り、明確にその系譜をたどることができない。従って、パッション川流域では、セー土器文化の赤色系土器は、アルタル遺跡地点で、北東への道をとって、テイカル、ワシャクトウン遺跡などを中心とするペテン低地へ入ったのではないかと考えられる。

また、セイバル遺跡出土の赤色系土器群中、一つの型式を構成すると考えられる土器がある。これは、スリップを用いた暗赤色土器であるが、表面の色調は、明らかにアベリイノ式赤色土器のうちで、セイバル特有の暗赤色を呈するものと同一である。しかし、この型式の土器は、特に口縁部外壁に数条の溝状の凹みを環するもので、皿、鉢、深鉢形など、殆どすべての器形に共通して、この文様技法が用いられているのに特長がある。これは、セトオク (Setok) 型式という名称でよばれるものであるが、破片数 75 片で決定された型式であるだけに、なお問題を残している (Fig. 6.—33~36)。しかし、口縁部にのみ横位でこの種の溝状の凹みを巡らす文様手法の土器は、マモン土器文化の中にも存在している。マヤ南低地帯では、この種の「横位溝状凹み紋」とでもよべる文様をもつ土器は、先古典期中・後期に現われる特長である点も、あわせて考えなければならないであろう。また、アベリイノ系赤色土器のうち、刻線文をも

つ一群の土器がある。ピコ＝デ＝オロ (Pico de Oro) 型式である (Fig. 5. —29~35) (Fig. 6. —22~25)。色調は、暗赤色系であるが、広く明確な刻線文を口縁部に巡らすものが多い。器形は、外反した口縁が、口唇部近くで更に外側に引き出されるような形で曲げられているため、平たく広い口縁部をもつようになっている皿や浅鉢形、テコマテなど多くの形態をもっている。この型式の土器は、アルタル遺跡にも発見されているが、両者間には刻線文の手法に微妙な相違がある。刻線は幅広いものと細かく、明確な縁をもって刻されたものの二種類があるが、両者は、もともと別系統の土器であるかもわからない。今後の資料の増加によって結論が出されるであろう。

セイバル出土の赤色系土器のうちで、最後の型式に属するものは、ヤルマンチャック (Yalmanchac) 式押圧文土器である。この型式は、前述の如く、バルディゾン式押圧文土器とその手法が酷似するものであるが、その空間的広がりにおいては注意する必要がある。特に、ヤルマンチャック式押圧文土器は、バルトン＝ラミエ遺跡^⑭からも、エル＝サルバドルのチャルチュアパ遺跡^{⑮⑯}からもその存在が知られている。このようなことから、ヤルマンチャック式押圧文土器文化は、広い範囲にわたって拡散していたのではないかと考えられる。しかし、これとても問題がないわけではない。バルトン＝ラミエ遺跡のホコテ橙褐色土器は、ヤルマンチャック式よりは、むしろアチオテス無スリップ系の土器に類似しており、ホコテ土器と密接に関連する土器つまり、ダウベ式土器は、アルタル、セイバル両遺跡の一方には発見されていない^{⑰⑱}。また、アルタル、セイバル、バルトン＝ラミエ遺跡などに発見されているホコテ式橙褐色土器は、ジェリー＝クリーク式土器の早い段階の土器と考えることができるが、これは、明かにセーないしは、リアル＝セー土器と同時期のものと考えられる。しかし、ティカル遺跡 (写真図版 4. 5) やワシャクトウン遺跡など、ペテン低地帯の主要都市的中心地においては、上記のことを明確に証明している証拠はないのである。

セイバル遺跡におけるリアル＝セー土器群の第三番目のグループは、白色系土器である。ウエッチェ (Huetché) 式白色土器とよばれるこの土器群は、白色スリップを用いたもので、器形には、テコマテ、内傾した胴部及び肥厚した口縁部をもつ鉢形、外反するか外湾するか、その胴部が著しく外側に突き出た口縁をもつ皿形、胴部は球形状に湾曲するが真直ぐにのびる頸部をもつ深鉢、外反して更に外湾する頸部をもつ壺などに、この型式が多い (Fig. 6. —31.32)。壺形土器では、内傾する口縁部の口径が、著しく小さくなるものから、やや広がりをもつものまでの差があり、口径が著しく小さくなるものは、むしろテコ



写真図版 1. セイバル遺跡の石碑. 2. セイバル遺跡. A-3 建造物. 3. パッション川. 対岸の近くにアルタル遺跡がある. 4. テイカル遺跡のピラミッド群. 5. テイカル遺跡. No.2 ピラミッド. (筆者撮影)

マテ形に近いものである。また、肥厚した口縁をもつ土器は、この種の鉢形土器に多い点が注意される。また、皿形土器で著しい特長となるのは、外反した口縁部の口唇部にかなり間隔のある抉り込みを入れて、凹凸をつけたものがある (Fig. 6.—28)。特殊な土器形態として注目されるであろう。また、壺は口径が小さいのに比べて、体部が大きくなるのが目立っている。

ウエッチェ式白色土器には、アベリイノ式赤色系土器の中の一型式であるセトオク式土器と同様の横位溝状凹み文をもつ土器がある。器壁面の仕上げが入念に行われており、溝状の凹み文様は、赤色系のものに比して、ややその幅が小さくなっているものである。しかし、セイバル遺跡では、白色系土器にも、赤色系土器と同様の手法が用いられていたことが判明している。この種の特異な文様をもつ白色系土器群をエドムンド (Edmund) 式土器と呼んでいる。

また、白色系には、刻線文土器が存在する。この刻線には、やや幅の広い刻線と鋭く細い刻線との二種類があるようであるが、口縁部に二、三条を巡らすものから、格子目状のもの、幾何文的に細刻線を配するものなど、ひじょうにバラエティに富んでいる。器形は、テコマテが最も多く、鉢形、皿形がこれに次いでいる。器形の中でも壁が垂直になるか、丸く湾曲するかの深鉢形に近い土器があるが、これらは、白色系刻線文土器に特に多く見られる特長である。また、この刻線文土器の一群は、セイバル遺跡からのみ特に多く発見される傾向をもち、アベリイノ式赤色系土器群のピコ＝デ＝オロ式刻線文土器と共通する一面をもっている。つまり、パッション川流域のリアル＝セー系土器群の中で、赤・白色系土器には、文様、スリップ処理などに類似した技法をもつ刻線文土器が存在しており、それらは色調を異にするだけで、殆ど差がつけられないものである。刻線文土器は、ペテン低地の早期土器文化、マモン文化層にも存在している。特に、マモン土器文化のパソ＝ダント (Paso Danto) 式刻線文土器とセイバル遺跡発見の赤・白色系刻線文土器とが、どのような関連をもつものであるかは、まだ、明確になっていない。しかし、ペテン低地の刻線文とパッション川流域の刻線文が無関係であるとは考えられないので、この点に関する資料が増加することが切望されるであろう。

セイバル遺跡におけるリアル＝セー系土器の最後に残った土器群は、黒色系土器群である。セイバル遺跡では、黒色系土器は、クリサント (Crisanto) 式土器として一括されるが、文様技法によって、二種類の型式に大別できようである。クリサント式黒色土器は、アルタル遺跡に発見されるものが、その典型である。セイバル遺跡からは、約 70 個の黒色系土器の破片が発見されているが、器壁表面の色調は、スリップを用いて、ワックスをかけたようなにぶい光沢を

もつ黒色が主で、色調も褐色の強い黒褐色から灰色をした黒色までの数段階の変化が認められる。表面調整は、ひじょうに入念で、皿形、浅鉢形の容器には、内、外面ともスリップを用いて、強い光沢をもつように磨研されているものがある。アルタル遺跡のクリサント式黒色土器は、グアテマラ太平洋岸のラ＝ビクトリア遺跡^⑩のコンチャス文化層の黒色土器との類似が指摘されているので、この種黒色系土器の広がる範囲はかなり大きなものであったと考えられる。器形は、器壁の薄い特長的なテコマテとは逆に、器壁の厚い普通のテコマテがある (Fig. 5.—21)。皿形土器は、肥厚する口縁部をもつものと (Fig. 7.—9～13)、口縁部が、外側にやや強く張り出したものとの二種類があるようである。クリサント式黒色土器は、ペテン地方では、恐らくチュンインタ式黒色系土器への移行を示すものと考えた方がよいようである。勿論、チュンインタ式黒色土器には、先論で述べたように、なお多くの問題点も残されているが、ここでは上記のように推定しておきたい。なお、クリサント式黒色土器が発見された貯蔵穴の状況から、オルメカ文化との関連を考える説もあるが、オルメカ土器とクリサント式黒色土器との間には、明確な類似を認め得るような証拠はないのではなかろうか^⑪。黒色系土器のうちで、鉢形土器の外側口縁部に溝状凹文をもつ一群の土器がある。これは、アルタル遺跡ではクリサント式黒色系土器に一括されているものであるが、セイバル遺跡では、特に一型式として考えられている^⑫。また、刻線文土器の破片も存在するが、基本的には前述の赤・白色系刻線文土器の文様技法とかわらないものである。また、ペテン地方のマモン文化層のデプレシオ (Depresio) 式刻線文土器との関連を考える必要があろう。

以上の如くパッション川流域のセイバル遺跡を中心とするリアル＝セー土器文化は、その内容が多岐にわたっているため、不明な点が多い。このような疑問点は、パッション川を西へ約 50 km 下った場所に形成されたアルタル遺跡に発見されるセー系土器文化と対比することによって、或は解明の緒口が与えられるかもしれない。しかし、セイバル遺跡のリアル＝セー土器文化は、本質的には、アルタル遺跡のセー土器文化圏に含まれるものと考えておきたい。前述の如く、両者の土器文化で特長的な点をとらえて、随所に、両者間の対比を行って来たが、それはどこまでも、パッション川流域、いわばセイバルとアルタルの両遺跡を中心とする半径約 50 km の範囲内でのセー系土器文化の対比であった。セー系土器文化のパッション川流域外地域との対比は、項を改めて述べなければならないが、セー系土器文化は、パッション川流域に開花したマヤ南低地の最も古い土器文化であり、その中心的な拠点は、アルタル遺跡であったと考えられる面が多いのである。従って、アルタル遺跡発見のセー土器文化

は、「セー土器文化圏」といった、いわば「マヤ南低地帯最早期文化圏」というマクロ的な把握を必要とするであろう。つまり、セイバル遺跡以外の地域との対比がセー系土器文化をさらに浮彫りにし、その系譜や周辺地域との関連を考察する上で重要になってくる。このような点に留意しながら、次に、アルタル遺跡発見のセー土器文化について考察してみよう。

B) アルタル＝デ＝サクリフィシオス遺跡発見のセー系土器 群＝

アルタル＝デ＝サクリフィシオス（以下アルタルと略す）遺跡は、パッション川とサリナス川との合流点に近い、パッション川の左岸台地にある（写真図版3. パッション川、対岸はアルタル遺跡の近郊）。遺跡付近は低湿地帯が広がっているが、遺跡そのものは、川の水面より約9 mの高い段丘上に形成されている。遺跡は、A、B、Cの三群に大別され、Aグループは最大で遺跡の末端部にあり、パッション川に直接臨む所にある。Cグループは最小で、直接Aグループの西側に接している。しかし、両者間には、わずかな高低差があり、地区的に区別されているようである。Bグループは、Cグループの北西、Aの西側に位置し、川岸からは、約100 m離れた場所にある。遺跡は、東西約1 km、南北約800 mの範囲に広がっており、熱帯樹林で覆われている^②。

セー土器に関する資料は、85 A ピット及び62 B、Gピットから得られたものである^③。セー土器は、これらピット以外の場所からも発見されているが、最もよく層序的に把握でき、相対編年的に確実な資料が得られた地点は、以上のピットからである。

アルタル遺跡のセー土器は、16 型式に分類できる。セイバル遺跡のリアル＝セー土器で考慮したのと同様に、四種類に大別できる^④。第一のグループは、スリップを用いないグループで、アチオテス式無スリップ土器、第二のグループは、赤色系土器で、アベリイノ式赤色土器、第三のグループは、白色系土器で、ウェッチェ式白色土器、第四のグループは、黒色系土器で、クリサント式黒色土器の四種類である。これら四種類の土器は、いずれもセイバル遺跡のものと同一の型式名で呼ばれ分類の規準も、同じ考え方によっているが、両者間の土器群が、全く同様というわけのものではなく、同一型式名であっても、微妙な違いがあることも事実である。また、これら四種類のグループとならんで、オレンジ色系土器、二色系土器、刻線文系土器、押圧文系土器、印章文系土器、貼付文系土器が分類されるが^⑤、前述のように、セー土器文化圏の中で、それらが、特に近隣諸地域の土器文化との対比において問題になる場合にのみ、改めて考察することとし、主に、第一から第四のグループに分類できるセー系土器

群を考察してみたい。

アチオテス式無スリップ土器は、石英や砂利をテンパーとして、明橙色に焼成された土器が多く、表面は、スリップを用いていないだけに、粗雑な仕上りの土器である。器厚は、全体的に厚く作られており、この点で、他のアチオテス式土器と区別される。バルトン＝ラミエ遺跡のホコテ式橙褐色土器は、極めて、このアルタル遺跡のアチオテス式土器に似ている点を考えると、両者間の接触や関連の事実を否定することはできないであろう。しかし、これは、アチオテス式土器でも、R. E. W. アダムスによって、ラウダル亜型式と名づけられているものが、特に、バルトン＝ラミエの橙褐色土器との関連を示すものである点を注意しなければならない²⁶。また、アチオテス式土器のうちでも、アチオテス亜式は、ワシャクトウン遺跡のものと同一と考えることができ²⁷、また、チアパス州のサンタ＝クルス遺跡出土のチアピイジャ (Chiapilla) 式土器と極めて強い類似性をもっている点も注意する必要がある²⁸。なお、セイバル遺跡のアチオテス式無スリップ土器と類似するものは、サンタ＝クルス遺跡出土のものではなく、ワシャクトウン遺跡出土のものであるということを付け加えておこう。

アベリイノ式赤色土器は、セイバル遺跡のリアル＝セー土器文化の同名型式にも見られるところであるが、前述のように、黒ずんだ赤色系土器は、むしろセイバル遺跡に特有なものであったと解釈できるようである。

次に、ウェッチェ式白色土器について考察してみよう。この型式の土器は、胎土がルーズであつたらしく、土器の共通の性質である多孔質性が、更に強調されている²⁹。これはテンパーの大きさが均一でなく、不揃いであつたために惹起されたとも解釈できる面をもっている。白色系土器では、胎土の選定がひじょうにむずかしいために、ある程度、限定された地域に産する粘土を使用せざるを得ず、同時に、テンパーも不均質なものを用地ざるを得なかったのであろう。器厚は、一般的には、やや厚めであり、特に、テコマテ形、深鉢形の口縁部付近にこの傾向が、強く見られる。白色系土器は、セイバル遺跡にも同一手法の土器が発見されている点などから考えると、パッション川流域には、かなり広く分布した傾向をもつものであつたろう。しかし、セイバル遺跡の白色系土器は、形態的にはアルタル遺跡のものよりも大き目のものが目立ち、また、テンパーも異っている。どちらかといえば、セイバル遺跡で使用されたテンパーは、細小の均質なものから、中程度のものまでが用いられており³⁰、この点では、アルタル遺跡のものより焼きしまりがよく、表面調整も入念に行われている。白色系土器の中で注意を要するのは、クリーム色を呈する一群の土器である。ク

クリーム色の土器は、チアパ＝デ＝コルソ遺跡^{③①}のチアパ (Chiapa) II, III期クリーム色土器と対比し得る面をもっているが、アルタル遺跡のものは、チアパII期, III期のものに比し、スリップは、ひじょうに薄く用いられていて、両者間に微妙な相違があることがわかる。アルタル遺跡のクリーム色土器は、明らかに色調から見れば、ピタル (Pital) 式クリーム色土器との類似を考えねばならない^{③②}。ピタル式土器は、色調にかなりの変化があるが、表面には貫入的なひび割れが認められる。また、ウェッチェ式白色系土器は、チアパ＝デ＝コルソ遺跡のチアパIII式土器に相当する多くの要素をもっている。チアパIII式土器は、チアパス州の中央盆地地域を中心とする先古典期後期IIからIIIにかけての土器型式を包括するものと考えることができ、ペテン地域との対比においては、マモン土器文化の後半頃に相当するものであろう。問題となる点は、アルタル遺跡でのウェッチェ式白色系、クリーム色系を含めて、土器の中で明確にその系譜がたどれるものが、どの型式に属すかを知らねばならない点であろう。現在の資料では、前述のピタル式クリーム色土器との類似は否定できないところであり、従って、セー土器文化の白色系土器の中には、西からの強い影響のもとに成立したと考えられる要素を見出し得るということがいえよう。

次に黒色土器について述べる。アルタル遺跡では、黒灰色のうちでもかなり黒色度の強い土器群が出土している。器形は深鉢形、テコマテ形、短頸壺形、皿形など、種類に富んでいるが (Fig. 5. ~7. 参照)、この種の土器の胎土には、殆どが砂をテンパーとして使用している。焼きしまりも良好であるが、器厚の薄いテコマテが、特長的である。器体は、0.6 cm ~ 0.9 cmの厚さのものが普通であるが、口縁部附近を除いて、器体の殆どすべての厚さが0.6 cmというのは、ひじょうに薄い仕上げである点は注目されてよいであろう。また、表面の色調は、黒灰色の強いものが多く、総じて、器体全面に黒色スリップを用いて、焼成後つや出しの為の磨きを行っている傾向がある。しかし、黒色系土器は、グアテマラの太平洋岸のラ＝ビクトリア遺跡からも発見されており、コンチャス文化層のオコス式黒色土器 (Fig. 5.—21) とひじょうに大きな類似を示している点は、注目される点であろう。また、ペテン低地の黒色系土器で、最も明確になっているものにチュンインタ式黒色土器がある。この土器については、先論でふれておいたので、詳しくは述べないが、この土器と比較する限り、アルタル遺跡とペテン地方との関連を無視することはできないことであろう。つまり、アルタル遺跡での黒色系土器は、ペテン地方では、マモン土器文化のチュンインタ式黒色土器へと明確に連続していると考えることができよう。従って、セー系土器文化は、アルタル遺跡、セイバル遺跡を一つの拠点として、

少なくとも東北への道を通して、ペテン地方の中心部へ到着したと解釈することができるのではなかろうか。前述の如く、このことは、無スリップ系土器、赤色系土器の諸要素を比較してもいえることであり、セー系土器は、更に東北ペテン地方にも入って、そこでマモン土器文化成立に大きな役割を担ったものであったのだろう。

アルタル遺跡におけるセー土器は、以上の他に更に数型式に分類できるが、特に注意されるものを二、三述べてみたい。

第一は、ヤルタタ (Yaltata) 式橙色土器である。器形には、テコマテもあるが、短頸、長頸の両壺形土器が多く、表面は磨かれている。器厚は、ひじょうに薄く仕上げられているものが多く、0.4~0.6 cm を測っている^③。また、マモン土器文化の赤色系土器群のうちで、主要な一型式であるホーベンチュード式土器との関連が強く認められる。両者は、スリップを用いて、薄く、柔かい肌ざわりの仕上げを行っており、技法的な連続が、明白に看取される。このことは、ペテン地域の早期マモン文化の主要遺跡であるワシャクトウン遺跡においても、ホーベンチュード式赤色系土器の源は、やはりパッション川流域にもってこざるを得ないのではなかろうか。

第二は、特殊セー土器とでもいえるものである。これは、型式名は明確でない。しかし、黒色系土器と同じように、総体的には黒色であるが、口縁部だけが白色を呈する土器である。口縁部だけが白色で、器体全体は、黒色ないしは黒灰色、暗赤色など、さまざまな色調をもつユニークな土器は、空間的には、かなり広い範囲にわたって、その存在が知られている。チアパ=デ=コルソ遺跡では、チアパII, III期に、その存在が明らかになっている。このような口縁部だけが白色で、器体部が黒色系といった特殊な土器の製法に関しては、現在もまだ結論はでていない。しかし、チアパス州のミラドル (Mirador) 遺跡^④から発見されるものは、大形のかなり粒子の粗いテンパーを加えた胎土を用いているが、胎土そのものに、白色、黒灰色の二種類があるようである。表面の黒色の色調の変化は、還元焼成の度合によって異なるようであるが、この際、胎土自体が白か、黒灰色系かによって、多少、黒色度にも変化があるようである。しかし、口縁のみ白色で、器体部が黒色という特殊な焼成の仕方に関しては、なお、正確なことはわかっていない。しかし、ミラドル遺跡の例で、焼成方法が推定されている。焼成前、窯の中に入れた時に、植物性の材料で容器の口縁部のみをしっかりと包み込んでしまう。いわば、植物性の材料の中に、口縁部のみを埋め込むのである。植物性材料が、焼成時、どのような役割を果すのかは、確かでないが、還元焼成か、酸化焼成をするかによって強い影響を

うけるわけである。口縁部周辺を覆った植物材料が、燃料となるのか、または、さらにその上に粘土その他の防壁的な役割を果すものを塗って、焼成にもっていくのか、技法的には、多くの疑問がある。しかし、最終的に還元焼成されたようで、その時点では、口縁部は、焼成前に施こされた処置によって、還元焼成の影響を直接うけなくなり、白色に近く残されたと推定されている。

セー土器文化では、この特殊白・黒土器は、数量的には、極めて少ないが、チアパ＝デ＝コルソ遺跡のチアパIII期に存在しているベンタ（Venta）式特殊白・黒土器と同系と考えられる。

以上のように、アルタル遺跡出土のセー土器文化は、直接的にはセイバル遺跡のリアル＝セー土器文化と対比されるべき多くの要素をもっていることがわかるが、パッション川流域に広がったこのセー系土器文化は、ペテン地方にも多くの影響を及ぼし、かつ、その文化の二、三の特長は、かなりはっきりした形をとって、マモン土器文化へと受けつがれていることがわかってくる。しかし、セー土器文化は、更に広い周辺諸地域との関連において考察しなければならない点をもっている。特に、チアパス州を中心とする地域は、アルタル遺跡、セイバル遺跡に発見されるセー系土器文化とひじょうに類似した多くの特長をもつ土器文化の存在が知られている。従って、次にこれら諸地域との関連を考察することが必要であろう。

1) チアパ＝デ＝コルソ（Chiapa de Corzo）遺跡

チアパ＝デ＝コルソ遺跡は、チアパス州の最大都市、テュクストラ＝グティエレス市から東へ約 15 km 行ったチアパ＝デ＝コルソ町にあり、町名と同名の遺跡である。遺跡の北寄りのところを No. 21, 22, 37, 40 などのマウンド遺構を一部削平してパン＝アメリカン道が走っているが、遺跡その物は、約 1 km 四方に数多くのマウンドをもっている。グリファルバ川の上流域にあり、東側にその支流、ナンダルミ川、北側にチキト川が流れ、両川にはさまれた川面より、約 40 m の高さの台地上に形成された遺跡である³⁹。

チアパ＝デ＝コルソ遺跡とマヤの南低地帯との交流については、古くから議論されていたが、この遺跡の本格的な調査は、1955 年以降続けられ、多くの成果があげられている。先古典期 I 期 2（約 1400 B.C.）以降のコトオラ文化層から古典期早期後半頃のラグナ文化層まで、いわば、先古典期から古典早期段階までの文化しか、現在のところ明確になし得ないが、後古典期の土器破片も、ごくわずかながら発見されている。しかし、現在の所、後古典期について説明できる程の十分な資料ではない。

さて、セー土器文化との関連において、この遺跡で最初に問題になる点は、

チアパII期、つまり、ディリイ文化層である³⁶。この文化層の土器は、壺形、皿形、鉢形と殆どアルタル遺跡のものと同じ形態のものが発見されている (Fig. 5. ~7 参照)。しかし、アルタル遺跡で大多数を占める形態が、チアパ=デ=コルソ遺跡では、逆に甚しく数少なくなっているという事実もある。例えば、短頸壺は、チアパ=デ=コルソ遺跡では、ひじょうに少ないが、アルタル遺跡では、逆に多くなっているといったようなことである。また、クリーム色系のスリップを用いた土器は、一般的には、チアパ=デ=コルソ遺跡に多く、アルタル遺跡では少ない、といったようなことである。このような事実は、両者間に本質的な相違が存在する為であるかもしれないが、最も著しい相違を示すものは、スリップの用い方である。パッション川流域のセー系土器に用いられたスリップは、全体的に柔らかく、薄い感じのことが多い。これに反して、チアパ=デ=コルソ遺跡のものは、厚く、硬質な感じを与えるものである。従って、ディリイ土器とセー土器との対比では、形態的に極めて類似したものであっても、表面調整や形成の過程、文様技法などに、大きな相違があったのではないかと考えられるのである。また、二色塗彩土器は、赤色とクリーム色とかが、普通に用いられているが、セー系土器には、殆ど数える程しか発見されていない。しかし、チアパ=デ=コルソ遺跡からは、量的にもはるかに多く発見されている。例えば、セー土器での二色塗彩土器は、下地黒色で、その上に赤色を塗彩したダタイル (Datile) 式土器であるが (Fig. 6. — 29. 30)、ディリイ文化層には、この種の土器は発見されていない。また、文様技法で前述の刻線文や押圧爪形文などは、セー系土器には多く見られる文様であるが、ディリイ文化層では、3 b 型式 (Fig. 6. — 18) の土器にだけ見られる特長である³⁷。つまり、セー系土器とディリイ文化層の土器との間の類似性は、それらが、同時性を物語っているということはいえても、本質的に同質的であるということはいえない。例えば、前述したセー系土器のアベリイノ式赤色土器は、チアパ=デ=コルソ遺跡では、エスカレラ文化層、つまり、チアパIII期のムンデット式赤色土器と類似しているところから、両地域の赤色系土器の近似性を推定し得る有力な資料であるが、それが明らかにチアパIないしII期からの継承であることを推定する資料にはならない。またG. R. ウーリーは、セイバル遺跡の発掘資料によって、リアル=セー土器文化とアルタル遺跡のセー土器文化とが、お互に深い関連をもつのは当然であるが、チアパ=デ=コルソ遺跡の土器文化は、リアル=セー土器文化と深い関連を有している、としている³⁸。しかし、ここで問題となる点は、セー系土器が、チアパ=デ=コルソ遺跡の土器文化の中で、チアパII期か、III期かのいずれに最も類似しているかを決定することであ

ろう。現在、結論を下し得るような決定的な資料は、まだ出ていないと考えられるが、アルタル遺跡でのセー土器文化とセイバル遺跡でのリアル＝セー土器文化とは、チアパ＝デ＝コルソ遺跡の土器文化との関連で考える限り、リアル＝セー土器文化は、チアパII期、つまり、ディリィ文化層、セー土器文化は、チアパIII期、即ち、エスカレラ文化層と密接な関係をもつものであると考えられる。しかし、このことが、直に、パッション川流域のセー系土器文化の中心であるセイバル遺跡とアルタル遺跡の先後を決定することにはならないのは勿論なことである。

2) ミラドル (Mirador) 遺跡 (チアパス州) ③⑨

ミラドル遺跡は、チアパ＝デ＝コルソ遺跡からは、西南へ約 50 km 離れており、グリファルバ川の支流、ラ＝ベント川に臨む遺跡である。約 500 m 四方に四つの大きなマウンドをもち、その他は、約 20 ばかりの小さなマウンドで占められている遺跡である。この遺跡出土のテコマテは、セー系土器のそれと酷似している点が注目される。特に、アルタル遺跡で 1 e 型式テコマテ (Fig. 5. 一 5 ~ 8) と呼ばれるものとの類似が目立っている。ミラドル遺跡でのテコマテは、口径が甚しく小さくなるもの、やや広くなるもの、器体が球形から、いわゆる“ひしゃげ”形とよばれるものまで、多くの器形をもつが、セー系土器に見られるテコマテとひじょうによく似たものである。表面上の文様には、浅い細線文、沈線文、刺突列点文などがあり、セー系土器との強い類似が考えられる④⑩。

3) サンタ＝クルス (Santa Cruz) 遺跡 (チアパス州) ④⑪

サンタ＝クルス遺跡は、チアパス州の中央盆地における主要な考古学上の遺跡であるばかりでなく、既に、1956 年に、G. ロー教授によって調査された時に、この遺跡が、先古典期早期頃の古い文化をもっていたことが、指摘された。遺跡は、南北約 500 m、東西約 300 m の広さに三つの主要なピラミッド神殿をもち、あとは、約 70 個に及ぶ、大・小のマウンドが散ばっている。

セー系土器との類似は、この遺跡のブレロ (Burrero) 文化層の土器に見られる。特に、ミラドル遺跡が、テコマテに酷似したものをもっていたのに対して、ここでは、外反胴平底皿に多くの類似点を見ることができる。しかし、これは、どちらかといえば、セイバル遺跡のリアル＝セー土器に類似するものである。また、ブレロ文化層の無スリップ赤色テコマテは、セー系土器に頻出するアチオテス式無スリップ土器との間の関連を想定することができるものであろう。

4) ラ＝ビクトリア (La Victoria) 遺跡 (グアテマラの太平洋岸) ④⑫

既に、先論において述べたように、グアテマラの太平洋岸の遺跡においては、先古典期早期 I 以降の土器文化が知られている。これら土器文化の中で、特に、セー系土器との関連で問題になるのは、ラ＝ビクトリア遺跡のコンチャス文化層である。この文化層に特有な、コンチャス式白色系土器は、セー系土器のウェッチェ式白色土器と酷似する面をもっている。しかし、形態的には、両者の間にかなりの相違がある点に注意せねばならない⁴³。特に、セー系土器には、三足土器が殆ど存在しないのに対して、コンチャス式土器には、既に、三足をもった容器が、かなり多く出現していることである。このような形態上の相違が、何故おこったのか、については、地域的特性と考える考え方もあるが、これら本質的相違がある場合には、直接的な関連を考えるよりは、間接的接触を考えたほうが、説得的ではないかと思う。例えば、セー系土器のアチオテス式無スリップ土器群には、ラ＝ビクトリア遺跡のコンチャス式白色土器やオコス式黒色土器、オコス式灰色土器に見られる浅鉢形土器に極めて類似したものがある。しかし、セー系土器には、三足形が現われず、ラ＝ビクトリア遺跡のある太平洋岸には、逆に現われるという事実があるわけである。しかし、太平洋岸土器文化は、テワンテペック地域の先古典期早期 I, II の土器文化、更には、メキシコ湾岸土器文化との関連が深く、これら地域は、相互に密接に結び付いていたことは、既に先論で見てきたところである。従って、コンチャス式土器に見られる様相は、どちらかといえば、むしろ、パッション川流域よりはるか西方及び西南方地域相互の関連が強く看取されるところであり、パッション川流域との関連は、それらが時期的におそくなった時点か、或は、例えば、オルメカ文化のような、広範囲に影響を及ぼした文化を通して、間接的な関連をもったものと解釈しておきたいのである。事実、ラ＝ビクトリア遺跡のコンチャス式土器とラ＝ベント遺跡の土器との間には、多くの類似点がみられ、同時にそれは、前述のチアパ＝デ＝コルソ遺跡、ミラドル遺跡、サンタ＝クルス遺跡などの土器との間にも、多くの類似する要素をもっているのである。更に付言すれば、ラ＝ビクトリア遺跡のコンチャス 1 式系の白色土器は、センポアラ市近くの、エル＝トラピツチェ (El Trapiche) 遺跡の早期土器文化との関連が注意されるのである。従って、パッション川流域のセー系土器も、その周辺地域との関連を考察していくと、間接的にしろメキシコ湾岸のパヌコ遺跡 (Panuco) との関係が問題になってくる。しかし、この論稿では、マヤ南低地帯、特に、パッション川流域に出現した最初の土器文化を問題にしているのであるから、むしろ、直接的な接触、交流を示す資料が重要なのである。従って、セー系土器文化のペテン低地帯との関連が考察される必要があろう。換言すれば、最も

確実にセー系土器文化を継承したと考えられる土器文化の要素の究明が必要になってくるということであろう。この意味において、先論で述べたように、セー土器文化は、直接的にはマモン土器文化へと発展したと考えることができる面をもっている。しかし、セー系土器文化のどの部分がどのような具体的な形をとって、継承されていったのか、という点については、なお多くの問題点があるといわねばならない。

(結 語)

セイバル遺跡とアルタル＝デ＝サクリフィシオス遺跡を中心とするセー系土器文化は、前千年紀にパッション川流域に確立したことは明確であろう。セイバル遺跡のリアル＝セー土器文化の五型式の一つに伴った有機物の¹⁴C資料は、810—570 B.C. を測定している。しかし、アルタル＝デ＝サクリフィシオス遺跡でのセー土器文化に伴う¹⁴C年代資料は、930～650 B.C. を示している。これら¹⁴Cの日付のみが、パッション川流域の文化編年にとって、唯一絶対的でないにしても、この二つの日付は、セー系土器文化成立過程の一つの事実を現わしているのではないかと考えざるを得ない。先論で述べたように、セー系土器文化をもった人達は、ウスマシント川を遡行した人達であったろう。特に、ラベンタの発展が、タバスコ州の東端近くにまでオコス以降の土器文化を拡散するようになったのは、事実であったろうから、これが直接的な刺戟となって、ウスマシント川の遡行が開始されたと解釈したいのである。従って、セイバル遺跡以南には、現在のところ明確なリアル＝セー系土器の発見はない。このことは、セー系土器文化が、アルタル＝デ＝サクリフィシオス遺跡に先に到着し、そのあとサヤシチェ周辺を径由してセイバル遺跡の方へ広がったと考える方が、より説得的であろうと思うのである。しかし、セイバル遺跡の赤色土器は、アルタル＝デ＝サクリフィシオス遺跡のそれよりも、色調、スリップなどの技法から古く考える議論もあることは、既に述べた。これは、パッション川流域のセー系土器文化が、ガテマラ高地帯から北方へ伝播したという考え方が、その基本にあることも確なことである。最近、北部グアテマラ高地のコバン地域の調査で、グアテマラの北部高地にセー系土器文化に伴う資料と類似の資料が発見されたという報告はある。しかし、現在のところ、パッション川流域地帯に成立した土器文化が、西、ないしは西北からか、南、ないしは南西から入ってきたかに関しての資料は、まだ、少ないといえる。アルタル＝デ＝サクリフィシオス遺跡のセー土器とセイバル遺跡のリアル＝セー土器との間には、後者が

いくらか亜型式に富んでいるといっても、否定することのできない同質性が存在している。本稿で述べたように、両遺跡を典型とするセー系土器は、ラ＝ビクトリア遺跡のコンチャス1型式土器、チアパ＝デ＝コルソ遺跡のディリィ、エスカレラ両文化層の土器群との間に極めて近似した要素をもっていることが判明している。また、同様に、メキシコ湾岸のパヌコ地域のアギラル(Aguilar)文化層の遺物も、セー系土器文化との類似した点が指摘されている。つまり、前記四つの文化層とセー系土器文化層との対比によると、これらの文化層は、相互に極めて類似した諸要素を分有しているわけで、その為に遺跡がお互い地域的にかなり離れたところにあっても、編年的には、ひじょうに長い間、相互に関連をもちながら併存していたということがわかるのである。しかし、資料的に不満がある為に、なお、結論の出せない問題点が多く存在している。それは、メキシコ湾岸のパヌコ地域、グリファルバ川中流域のチアパス州中央盆地地域、グアテマラ太平洋岸のラ＝ビクトリア地域などと、パッション川流域のセー系土器文化圏との間の、いわば中間的地域についての資料が、極めて少ないことによる問題である。例えば、セー系土器文化と上記三地域間に存在した関係を示す要素が認められても、それが、どのような広がりをもって確認されるのか、また、その中間地帯とでもいえる地域で、どのように具体的に跡づけられるのか、といった問題点が、資料的にうまく追求できないのである。Ph. ドラッカーの調査したセロ＝デ＝ラス＝メサス(Cerro de las Mesas)遺跡⁴⁴の出土土器には、特にテコマテ、皿形土器にひじょうにセー系土器、特にアベリイノ式赤色土器及びアチオテス式無スリップ土器の同形態土器に似たものがある(Fig. 6.—1～3. Fig. 7.—1A～1C. 2—8)。セロ＝デ＝ラス＝メサス遺跡は、正に、中間地帯に存在する遺跡である。従って、例えば、パヌコ地方のアギラル文化層とセー系土器文化圏の中間地帯に存在するセロ＝デ＝ラス＝メサス遺跡の資料は、両者間の関連を考える上に、極めて有効であり、かつ具体的資料としての意味をもってくるが、このような資料の不備な地域では、先述の如く、結論を出す上に大きな障害があるわけで、チアパス州の南部やグアテマラの高地帯も、セー系土器文化圏とラ＝ビクトリア遺跡との中間地帯的な意味をもってくるのは当然である。これら中間地帯での、少なくとも先古典期中期I, IIの土器資料が必要になってくるわけである。

以上のように、なお、多くの疑問や資料の不足な点があるが、セー系土器文化は、パッション川流域に現われた最も古い本格的な土器文化であったといえよう。しかも、この土器文化は、アルタル遺跡では、サン＝フェリックス文化層へと継承され、セイバル遺跡では、エスコバ文化層へと受け継がれていった

と考えられる。セー系土器文化は、パッション川流域で、その後の発展のための一つの根拠地をもった。そして、それは、マヤ南低地帯という、マヤ古典期文明濫觴の地の基盤的、中核的な文化として位置づけられるのである。(完)

〈付記〉メキシコ、ベラクルス大学の人文学部のG. C. ブリスエラ博士には、多くの助言と御教示を頂いた。また、アメリカ合衆国、エル＝セリト市の「Info. 21」の石松氏には、文献資料の上で、大変に御迷惑をおかけした。紙上をかりて感謝の意を表したい。

〔その三注〕

- ① Willey, G. R., A. L. Smith, G. T. Tourtellet III, and I. Graham
1975 Number 1. Introduction: The Site and Its Setting in *Excavations at Seibal Department of Peten, Guatemala*. ed. by G.R. Willey. *Memoirs of the Peabody Museum of Archaeology and Ethnology*. Vol. 13. No.1. Harvard University, Cambridge.
- ② Willey, G.R. others: *ibid.* 1975. pp.24~49.
- ③ Smith, A. L.
1982 Major Architecture and Caches in *Excavations at Seibal Department of Peten, Guatemala*. ed. by G.R. Willey pp.5~263. *Memoirs of the Peabody Museum of Archaeology and Ethnology* Vol.15. Number 1. Harvard University, Cambridge.
- ④ 写真図版 1, 2 参照。
- ⑤ Sabloff, J. A.
1975 *Ceramics in Excavations at Seibal Department of Peten, Guatemala*. ed. by G. R. Willey pp.22~228. *Memoirs of the Peabody Museum of Archaeology and Ethnology* Vol.13. Number 2. Harvard University, Cambridge.
- ⑥ Willey, G. R. and others: *op. cit.* 1975, pp.46~50.
- ⑦ Sabloff, J. A.: *ibid.* 1975. pp.46~60.
- ⑧ Sabloff, J. A.: *op. cit.* 1975. pp.47~60.
- ⑨ Smith, R. E. and J. C. Gifford.
1966 Maya Ceramic Varieties, Types and Wares at Uaxactun: Supplement to "Ceramic Sequence at Uaxactun, Guatemala". *Tulane University, Middle American Research Institute, Tulane University Publication* 28. pp.125~174.
- ⑩ Adams, R. E. W.
1971 The Ceramics of Altar de Sacrificios. *Papers of the Peabody Museum of Archaeology and Ethnology, Harvard University* Vol.63. No.1. Cambridge. pp.18, 79~123.
- ⑪ Sabloff, J. A.: *op. cit.* 1975. pp.48~49.

- ⑫ Sabloff, J. A. : ibid. 1975. pp.229~230.
- ⑬ セイバル遺跡とアルタル遺跡の赤色系土器の比較に際しては色調の検討, その技法などが決定的な意味をもつだろう。
- ⑭ Hammond, N., Pring, P., Wilk, R., Donaghey, S., Saul, F. R., Wing, E. S., Miller, A. V., and L. H. Feldman
1979 The Earliest Lowland Maya ? Definition of the Swasey Phase. *American Antiquity* Vol.44. No.1. pp.92~110.
- ⑮ Sharer, R.J. and J.C. Gifford.
1970 Pre-Classic Ceramics from Chalchuapa, El Salvador and Their Relationships with the Maya Lowland. *American Antiquity* Vol.35. No.4. pp.441~462.
- ⑯ Sharer, R. J.
1974 The Prehistory of the Southeastern Maya Prehistory. *Current Anthropology* Vol.15. pp.165—187.
- ⑰ Sabloff, J. A. : op. cit. 1975. pp.52~53.
- ⑱ Adams, R. E. W. : ibid. 1971. p.18.
- ⑲ Coe, M. D.
1961 La Victoria An Early Site on the Pacific Coast of Guatemala. *Papers of the Peabody Museum of Archaeology and Ethnology* Vol.53. Harvard University Cambridge.
- ⑳ Sabloff, J. A. : op. cit. 1975. p.57.
- ㉑ Sabloff, J. A. : ibid. 1975. pp.55—57.
- ㉒ Smith, A. L.
1972 Excavations at Altar de Sacrificios, Architecture, Settlement, Burials, and Caches. *Papers of the Peabody Museum of Archaeology and Ethnology* Vol.62. No. 2. Harvard University, Cambridge.
- ㉓ Adams, R. E. W. : op. cit. 1971. pp.79~84.
- ㉔ Adams, R. E. W. : ibid. 1971. pp.78. 83~84.
- ㉕ Adams, R. E. W. : ibid. 1971. pp.13~78.
- ㉖ Adams, R. E. W. : ibid. 1971. p.18.
- ㉗ Smith, R. E.
1955 Ceramic Sequence at Uaxactun, Guatemala Volume 1. *Tulane University. Middle American Research Institute* pp.111~116. publication No.2. Volume 2. Fig. 15. a~c.
- ㉘ Sanders, W. T.
1961 Ceramic Stratigraphy at Santa Cruz, Chiapas, Mexico. *Papers of the New World Archaeological Foundation*, No.13. pp.28. 29. Provo, Utah.
- ㉙ Adams, R. E. W. : 1971. op. cit. p.25.
- ㉚ Sabloff, J. A. : op. cit. 1975. pp.53~55.

- ③① Lowe, G. W. and P. Agrinier.
1960 Mound 1. Chiapa de Corzo, Chiapas, Mexico.
Mason, J. A.
1960 Mound 12. Chiapa de Corzo, Chiapas, Mexico.
Hicks, F. and Ch. E. Rozair.
1960 Mound 13. Chiapa de Corzo, Chiapas, Mexico.
Mason, J. A.
1960 The Terrace to North of Mound 13, Chiapa de Corzo, Chiapas, Mexico,
*in Excavations at Chiapa de Corzo, Chiapas, Mexico. Papers of the New World
Archaeological Foundation Publication. No.1.* Brigham Young University. Utah.
- ③② Smith, R. E. : *ibid.* 1955. pp.111~112. *in* Volume 1.
Smith, R. E. : *ibid.* 1955. Fig. 77.a. 6. 8. *in* Volume 2.
- ③③ Adams, R. E. W. : *op. cit.* 1971. p.26.
- ③④ Agrinier, P.
1975 Mounds 9 and 10 at Mirador, Chiapas, Mexico. *Papers of the New World
Archaeological Foundation No.39.* Brigham Young University. Utah.
- ③⑤ Lowe, G. W. and others : *ibid.* 1960.
- ③⑥ Dixon, K. A.
1959 Ceramics from Tow Preclassic Periods at Chiapa de Corzo, Chiapas, Mexico.
Papers of thce New World Archaeological Foundation No.5. California.
- ③⑦ Adams, R. E. W. : *op. cit.* 1971. pp.117~118.
- ③⑧ Willey, G. R. and others : *op. cit.* 1975. pp.39~42.
- ③⑨ Agrinier, P. : *op. cit.* 1975.
- ④① Peterson, F. A.
1963 Some Ceramics from Mirador, Chiapas, Mexico. *Papers of the New World
Archaeological Foundation, No.15.* Provo. Utah.
- ④② Sanders, W. T. : *op. cit.* 1961.pp.34~50.
- ④③ Coe. M. D. : *op. cit.* 1961. pp.25~45.
- ④④ Adams, R. E. W. : *op. cit.* 1971. p.118.
- ④⑤ Drucker, Ph.
1943 Ceramic Stratigraphy at Cerro de las Mesas, Veracruz, Mexico. *Smithsonian
Institution Bureau of American Ethnology Bulletin 141.* Washington.